

初期仏教におけるアートマン観の一側面⁽¹⁾

畑 昌 利
(大 阪 大 学)

はじめに

古代インドにおいて、アートマンが靈魂を意味する語として用いられたことは周知の通りである。本稿では、主に Pāli 仏典内のアートマン関連の語の使用法を検討し、初期仏教におけるアートマン観について考察する。

1 ‘satta’, ‘viññāṇa’ 使用の意味するもの

五蘊非我を標榜する仏教において、アートマンに代わる輪廻主体として、‘sattva’ や ‘vijñāna’ が用いられることは既に指摘されている。⁽²⁾ それでは実際の様な文脈で、その両語が使用されるのか。本章では、外道説紹介の場面から相当する用例を1例ずつ挙げ、若干の考察を加えることにする。

(1.1) ‘satta’ の用例は、六十二見中の断滅論紹介に存在する。以下、Pāli 「梵網経」(DN i), 及び Pāli 「五三経」(MN cii) から一例ずつ挙げる。

(1.1.1) 先ず、「梵網経」断滅論第1見を見してみる。

idha, bhikkhave, ekacco samaṇo vā brāhmaṇo vā evaṃvādi hoti
evaṃdiṭṭhī: ‘yato kho bho ayaṃ attā rūpī cātummahābhūtika

mātāpettikasambhavo, kāyassa bheda ucchijjati vinassati, na hoti param marañā, ettāvatā kho bho ayaṃ attā sammā samucchinno hoti.’ ti itth’ eke **sato sattassa** ucchedaṃ vināsaṃ vibhavaṃ paññāpentī.

「比丘達よ、この世である沙門、又は婆羅門は次の様な説を持ち、次の様な見解を持っています。『ちょっと君、このアートマンは、物質を持ち、四大要素から成り、母と父に属するものの結合より成り、身体崩壊により断ち切れ、消滅し、死後は生じないのだよ。だから君、このアートマンは、この限りにおいてまさしく完全に途切れてしまうのだよ。』と。以上の様に、ある者達は、**存在する ‘satta’** の断滅・消滅・非存在化を説きます。」(DN I, p. 34)

下線部と太字部との比較により、断滅論者自身の言葉では‘atta’とあるものを、ブッダが‘satta’⁽³⁾と言い換えていることが分かる。パラレルを見るに、蔵訳ではこの様なアレンジは存在しないが⁽⁴⁾、漢訳「梵動經」では Pāli 同様の言い換えが確認できる⁽⁵⁾。また断滅論以外の論では、現世涅槃論で同様の現象が起きる一方、死後有想論・無想論・非有想非無想論では一貫して‘atta’⁽⁶⁾が用いられる。即ち、断滅論・現世涅槃論紹介のみに、‘atta’ではなく‘sat satta’⁽⁷⁾という表現が用いられているのである。

(1.1.2)「五三經」冒頭部では、未来に関する見解 5 種、即ち、(1-3) 死後有想／無想／非有想非無想論・(4) 断滅論・(5) 現世涅槃論が紹介される。この中、断滅論を挙げる際には、「梵網經」同様‘sat satta’⁽⁷⁾という表現が用いられる。そして引き続いて、これら 5 論が次の様に 3 論に纏められる。

iti (i) **santaṃ vā attānaṃ paññāpentī arogaṃ param marañā.**

(ii) **sato vā pana sattassa** ucchedaṃ vināsaṃ vibhavaṃ paññā-

penti. (iii) diṭṭhadhammanibbānaṃ vā pan' eke abhivadanti.

「以上の様に、(i) **存在するアートマンが死後、損なわれることのないことを**説いたり、或はまた、(ii) **存在する‘satta’の断滅・消滅・非存在化を**説いたり、或はまた、(iii) ある者達は現世涅槃を主張したりします。」(p. 228)

(i)は先の(1)-(3)を纏めたものである。したがって、死後有想論等を纏める際には、ブッダ自身が‘sat attan’と述べるが、断滅論の場合には、相変わらず‘sat satta’を用いているのである。そして、この様な‘atta’と‘satta’との併用は、両語の意図的な使い分けを示唆するものと考ええる。

(1.1.3) それでは、断滅論紹介に⁽⁸⁾‘satta’を用いる意図は何か。考えられるのは、いかに外道説の紹介とはいえ、ブッダに「アートマンは断滅する」と言わせない配慮の存在である。そしてその様な配慮は、「アートマンは永遠で断滅しない」というインド思想上の通念の是認に起因すると考える⁽⁹⁾。

(1.2) 次に‘viññāṇa’の用例は、Pāli「五三経」の死後無想論論難箇所が登場する。そこでは、「アートマンが死後想を持たないこと」を主張する無想論者に対し、ブッダが次の様に論難する。

yo hi koci, bhikkhave, samaṇo vā brāhmaṇo vā evaṃ vadeyya :
【aham aññatra rūpā aññatra vedanāya aññatra saññāya aññatra
saṃkhārehi **viññāṇassa** āgatiṃ vā gatiṃ vā cutiṃ vā upapattiṃ vā
vuddhiṃ vā virūḷhiṃ vā vepullaṃ vā paññāpessāmi ti, n' etaṃ
ṭhānaṃ vijjati】。

「実に比丘達よ、次の様に言う沙門または婆羅門がいますが、【『私は物質無しに、感受作用無しに、想い無しに、諸形成作用無しに、**認識機能の到来・離去・死没・登場・増大・増長・増加を**説こう。』とい

うこの様な道理は見つかりません。】」(p. 230 ; M. 版より太字部底本 : aññatra viññāṇassa を, M., Th. 版より, 下線部底本 : uppattiṃ をそれぞれ訂正。)

【 】の同文は SN 22.54に、識住の有無という文脈で登場する⁽¹⁰⁾。前後の繋がりを考えれば、【 】の本来の文脈は、主題が ‘viññāṇa’ で一貫する SN の方であり、「五三経」はそれを二次的に移用した可能性が高い。即ち、【 】の「想い無しに……認識機能の到来等があることは不合理」という内容が、「五三経」では「アートマンの死後無想は不合理」という主張に転用されているのである。⁽¹¹⁾そしてこの様な転用は、アートマンに代わる輪廻主体として ‘viññāṇa’ を用い得るという前提があってこそ可能なものである。

(1.3) 以上の用例から、‘satta’ の場合は、ブッダに「アートマンの断滅」を言わせない配慮、‘viññāṇa’ の場合は、「アートマンが死後無想」を論破する為の言い換えという使用意図が確認できる。五蘊非我を主張した仏教は、アートマンについて積極的な言説を為さなかった。しかし、外道との接触に際しては、否応なくアートマンに言及する必要が生じたであろう。上の 2 例は、その様な場合の打開策と解し得ると考える。

2 三人称動詞の意味するもの

初期仏典中に伝えられる断滅論の 1 パターンに、次の表現が存在する。

no c’ **assaṃ**, no ca me siyā, na **bhavissāmi**, na me bhavissati.

「私は存在しないであろう。私のものは存在しないであろう。」

私は生じないであろう。私のものは生じないであろう。」

ところが Pali 聖典中には、仏語としてこれに類似する表現が登場する。

no c' **assa**, no ca me siyā, na **bhavissati**, na me bhavissati.

「**それは**」存在しないであろう。私のものは存在しないであろう。

「**それは**」生じないであろう。私のものは生じないであろう。」

以下、これら 2 表現の用例検討を通じ、人称の差異が孕む問題を考察する。

(2.1) Bhikkhu Bodhi 師は、Pali 聖典中から件の 2 表現の用例を収集し、考察を加えておられる。師の結論を纏めるとおよそ以下の様になる。⁽¹²⁾

一人称のヴァージョンは断滅論として挙げられる。一方、三人称のヴァージョンは、ブッダが一人称のものを 'anattā' 説に合わせて変改したものである。そして、既に註釈家の時代に両ヴァージョンの混同が存在した。

師の指摘は、聖典及び註釈の厳密な読解によって導き出されたものであり、大まかな点に関しては、筆者も異論を持たない。ただし、現行テキストへのより批判的な視点並びにパラレルの検討によって、特に三人称のヴァージョンに関して、より正確な指摘ができると考える。以下、一／三人称それぞれの用例を、Pali 文献 (2.2) とパラレル (2.3) とに分け検討を行なう。

(2.2.1) 先ず、一人称の例として AN 10.29 [AN V, p. 63f.] を見てみる。

etaṃ aggaṃ bhikkhave bāhirakānaṃ diṭṭhigatānaṃ, yad idaṃ '**no c' assaṃ, no ca me siyā, na bhavissāmi, na me bhavissati** ti. evaṃdiṭṭhino bhikkhave etaṃ pāṭikaṅkhaṃ 'yā c' āyaṃ bhava appaṭikulyatā, sā c' assa na bhavissati, yā c' āyaṃ bhavanirodhe pāṭikulyatā, sā c' assa na bhavissati ti.

「比丘達よ、外道達の諸々の誤った見解の中で、'**no ca assaṃ** ——' というこれ、これが天辺です。比丘達よ、この様な見解をもつ者には、

次の様なことが期待されます。『生存に対するこの気が進まないこと
はないこと、それはこの者には生じないだろうし、生存の封閉に対す
るこの気が進まないこと、それはこの者には生じないだろう。』と。」
文脈より、‘no ca assaṃ —’ という表現が、外道の諸見解の中で最高のも
のとして挙げられていることが分かる。底本に付された脚註によれば、一
部の写本が下線部 ‘assaṃ’ の代わりに ‘assa’ の読みを伝える様であるが、
‘ahaṃ’ という主語を補う註釈の説明は一人称の読みを支持する。⁽¹³⁾

この他、SN 22.81, 152 (SN III, pp. 98f., 183f.), SN 24.4 (SN III, p. 205f.)
に同表現が登場する。それらは、何れも外道説或は断滅論として挙げられ
ており、註釈の記述 (Spk II, p. 306) も一人称の読みを支持する。

(2.2.2) 次に三人称の用例から、AN 7.52 [AN IV, p. 70] を見てみる。

idha bhikkhave bhikkhu evaṃ paṭipanno hoti ‘**no c’ assa, no ca me
siyā, na bhavissati, na me bhavissati**, yad atthi yaṃ bhūtaṃ, taṃ
pajahāmi’ ti upekhaṃ paṭilabhati. so bhava na rajjati, sambhave
na rajjati, ath’⁽¹⁴⁾ uttarim paḍaṃ santaṃ sammappaññāya passati. tañ
ca khv assa paḍaṃ na sabbena sabbam sacchikataṃ hoti.

「比丘達よ、ここで比丘は次の様に踏み込みます。『‘no c’ assa ——’。
私は、存在するもの、生じたものを捨て去る。』と、平静を獲得しま
す。彼は存在に熱くならず、生成に熱くならずに、より上の静まった
境地を、正しい知恵で見ます。しかしこの者は、その境地を完璧に目
の当たりにはしないのですよ。」

文脈より、‘no c’ assa ——’ の様に見る者は、静まりつつも完全には静ま
らないことが分かる。底本の脚註によれば、一部の写本が ‘assa’ の箇所
を ‘assaṃ’ とするが、主語に ‘kammaṃ’ を補う註釈の説明は、三人称の
読みを支持する。⁽¹⁵⁾ 同じ様なことが MN cvi Āṇaṇjasappāyasutta とその註

釈にもあてはまるが、⁽¹⁶⁾ 次の SN 22.55 [SN III, p. 55f.] の例は少し異なる。

tatra kho bhagavā udānam udānesi.

no c' assa no ca me siyā na bhavassati na me bhavissati ti.

evam adhimuccamāno bhikkhu chindeyya orambhāgiyāni sañño-
janāni ti.

「そこで世尊は、ウダーナを発せられたのだよ。『**no c' assa** ——’ と
この様に固定されつつある比丘は、下等な束縛を切るであろう。』
と。」

引き続き文で、その比丘とは ‘ariyasāvaka’ であり、‘no c' assa ——’ は
異生にとってのみ恐怖であるとされる。下線部に関しては、‘assam’ (M.,
Th. 版), ‘n’ ābhavissa’ (M. 版) という異読が伝えられる。註釈の説明は、
‘na bhavissati’ については三人称を支持し、⁽¹⁷⁾ ‘assa’ については2通りの解
釈を提示する。そしてその2通りがそれぞれ一／三人称の読みを支持する
ことから、⁽¹⁸⁾ ‘assam’ という異読の存在は、註釈の解釈を反映したものであ
る。また、ウダーナとして挙げられていることから、件の表現は韻文の可
能性がある。同じことが、Ud 7.8にも当てはまるが、⁽¹⁹⁾ 韻文として読むに
は、現行テキストとは異なる一人称の読みを必要とする。

(2.2.3) Pāli の検討結果は、Bodhi 師の指摘にほぼ符合する。ただし
仏語、即ち、三人称の場合に問題が2点。(1) ‘assa’, ‘bhavissati’ の主語
が不明であり、文脈からも読み取れない。(2) SN 22.55, Ud 7.8は件の表
現を韻文としている可能性が高いが、現行の三人称の読みでは韻律が崩れ
る。

(2.3) 上に見てきた諸經典には、主に有部系の文献にパラレルが存在す
る。以下、それらを Pāli の人称別に通覧し、先の問題解決を目指す。

(2.3.1) 先ず、Pāli 一人称から、AN 10.29のパラレルを見る。⁽²⁰⁾

Abhidharmadīpavibhāṣāpravṛtti ad 5.2 (Jaini [ed.] ; p. 245)

antagrāhadr̥ṣṭir api janmocchedapravṛttatvān nirvāṇavirodhini
saṃvegānukūlā ceti nākuśalā. yathoktaṃ bhagavatā ‘yeyaṃ dr̥-
ṣṭiḥ sarvaṃ me na kṣamata itiyaṃ dr̥ṣṭir asaṃrāgāya na
saṃrāgāya’ iti. tathoktaṃ ‘idaṃ agryaṃ bāhyakānāṃ dr̥ṣṭikr-
tānāṃ yad uta **no ca syān na ca me syān na bhaviṣyāmi na me
bhaviṣyati**’ iti.

「極端へと固執する見解もまた、命の断滅へと展開したが故に、涅槃
と相反するものであり、驚覚に順じているので、不善ではない。世尊
によって説かれている如し。『〈全てが私に適応しない。〉という見解
は、無熱情の為になり、熱情の為にはならない。』と。同様に説かれ
ている。『外道に属する諸々の誤った見解の中では、これ、即ち、‘**no
ca syāṃ** ——’ が最上なのです。』と。」⁽²¹⁾

太字部に、Pāli 同様の一人称の伝承が確認できる。その他、Abhidharma-
kośabhāṣya 5.19,⁽²²⁾ 『中阿含経』⁽²³⁾ の対応箇所も一人称の読みを伝える。

(2.3.2) Abhidharmakośavyākhyā の AN 7.52 (三人称) 相当部を見
る。

iha bhikṣur evaṃ pratipanno bhavati. **no ca syāṃ no ca me syāt na
bhaviṣyāmi na me bhaviṣyati** yad asti yad bhūtaṃ tat prajāhāmiti
upekṣāṃ pratilabhate. sa bhave ’smin na rajyate.

「ここで比丘は次の様に踏み込みます。‘**no ca syāṃ** ——’ と、この様
に平静を獲得します。彼はこの存在に対して熱くなりません。」(p.
270)⁽²⁴⁾

太字部の様に、Pāli とは異なる一人称の読みが確認できる。また、MN
cvi と AN 7.52は、共に『中阿含経』に相当漢訳を有し、やはり一人称の

読みを提示する。⁽²⁵⁾そして同じ様な現象が⁽²⁶⁾、SN 22.55や Ud 7.8のパラレルでも生じている。後者相当の Udānavarga 15.4を見てみる。

yasya syāt sarvataḥ smṛtiḥ satataṁ kāyagatā hy upasthitā
no ca syān no ca me syān na bhaviṣyati na ca me bhaviṣyati /
anupūrvavīhāravān asau kālenottarate viṣaktikām //⁽²⁷⁾⁽²⁸⁾

以上より、Pali 三人称に対する諸パラレルでは、Pali とは異なる一人称の読みが伝えられることが分かる。

(2.3.3) 件の表現には、Pali に対応を持たないものも存在する。そして管見の限り、それらは全て一人称の読みを持つ。以下、若干例を挙げる。

『阿毘達磨大毘婆沙論』卷第六十 (T. 27, p. 309c)⁽²⁹⁾

如契經說。〈苾芻當知。無聞異生以愚癡故怖畏涅槃。謂於是處，我不有，我所亦不有，我當不有，我所亦當不有。〉

くく内が經典引用(≠SN 22.55)である。他に、所謂「六見處」を伝える文献や、中觀論書にも類似の表現が登場する。⁽³⁰⁾⁽³¹⁾

Ratnāvalī 1.26 (Hahn [ed.])

nāsmi ahaṁ na bhaviṣyāmi na me 'sti na bhaviṣyati /
iti bālasya saṃtrāsaḥ paṇḍitasya bhayaḥkṣayaḥ //

(2.3.4) この様に、Pali では一／三人称に分かれるものが、Pali 以外の文献では、一人称に統一されている。そしてこの現象を最もよく表す例として、『順正理論』の記述を挙げておく。Abhidharmakośabhāṣya 5.19の相当箇所であり、【 】内は、先挙の Abhidharmadīpa と同内容である。

『阿毘達磨順正理論』卷第四十九 (T. 29, pp. 617c-618a)

【邊執見中執斷邊者，計生斷故不違涅槃。順厭離門故非不善。如世尊說。若起此見我於一切皆不忍受，當知此見不順貪欲隨順無貪，乃至廣說。又世尊說。(i) 於諸外道諸見趣中此見最勝。謂我不有，我所亦不

有，我當不有，我所當不有。】又此不畏大怖處故。如契經說。(ii) 愚夫異生無正聞者，有能不畏大可怖處。謂**我不有，我所亦不有，我當不有，我所當不有而不驚怖。**

「【極端へと固執する見解中の断滅論は、命の遮断を構想するので、涅槃と変わらず、厭離への門に順じているので、不善ではない。……中略……また世尊は説かれた。(i) 『外道達の諸々の誤った見解の中でこの見解、即ち、〈私は存在せず、私のものは存在せず、私は生じないだろうし、私のものは生じないだろう。〉が最も勝れている。』と。】またこれ(見解)は非常に恐ろしい所を怖れない故に〔涅槃と変わらない〕。經に説く如し。(ii) 『愚か者で正しい教えを聞くことない異生は、非常に恐ろしい所を怖れないことがある。〈私は存在せず、……〉と言っても驚愕しないのである。』と。」

上座於此作如是言。何有如斯下劣邊見能順解脫。以諸有情一切妄見皆入此攝。然我不知，有何意趣執此邊見能順解脫。此見下劣誠如所言。非方便門執生斷故。然此行相。(iii) 世尊有時爲諸苾芻無問自説。或有一類作是思惟。謂**我不有，我所亦不有，我當不有，我所當不有。**如是勝解時即斷下分結。故知此見能順解脫。由是應知非不善性。

「上座はこれに関して次の様に言う。『この様な下劣な偏見が、どうして解脫に順じ得ることがあるのか。〔というの〕衆生達の一切の妄見は全てこの纏まりに入っているからであるが、どの様な意図によって、この偏見が解脫に順じ得るかを私は知らない。』と。〔答える。〕この見解が下劣なのはまさに仰る通りである。〔というの〕方便の門でないのに、命の遮断に固執しているのであるから。しかし次の様な特徴もある。(iii) 『世尊はある時に諸比丘の為に無問自説された。或いは一類があってこの思惟を作った。〈私は存在せず、……〉と。

この様に正しく理解する時に、〔五〕下分結を断つ。』と。したがって、この見解は解脱に順じ得ると知りなさい。故に非不善のものと知るべきなのである。」

この様に、衆賢は件の表現を含む3經典を挙げている。そしてこの中、第二番目は対応經典を見出さないが、一番目と三番目が、それぞれ AN10.29と SN22.55とに相当する。Pali では人称の異なる兩經を一連の文脈で挙げている事実は、衆賢自身が、兩經内の件の表現を、同一の一人称の読みで読んでいた証左となると考える。

(2.4) 以上より、件の表現の伝承について2種の可能性が考えられる。

(I) 元来人称の区別があった→有部等が後に一人称に統一したことになり、そこには、韻律の不具合解消・主語明確という意図が推測できる。

(II) 元々は一人称のみ→Pali が註釈以前に、仏語のヴァージョンを三人称に変改し、外道説と仏語との一致を避けた。

Pali では伝承に揺れがあるのに対して、パラレルはことごとく一人称を伝える点、(I)の場合、他部派がわざわざ一人称に統一する理由が見つかからない点を勘案すれば、(II)がより有力であると考えられる。また、三人称のヴァージョンが有する韻律・文意の問題も(II)の可能性を支持する。注目したいのは、(II)の場合の改変方法である。韻律等の問題を作りつつも、「私は～ない」という表現をなくす方法を Pali は選択した。アートマンという語は用いられないものの、一人称に対する敏感な態度を示すものであると考える。

おわりに

以上、仏教がアートマン関連の語を避けている用例を紹介し、可能な解釈を提示した。今回は、可能性の提示のみであったが、今後、第二章で示した様な、部派間の相違も視野に入れ、より厳密な検討に入りたいと考える。

註

- (1) 引用した Pāli 文献は、原則的に Pāli Text Society 版を使用した³が、場合に依じてマンマー版 (M. 版; *Chaṭṭha Saṅgāyana*, [on CD-ROM, version III], Vipassana Research Institute, 2000), タイ版 (Th. 版; *The Buddhist Scriptures*, [on CD-ROM, version IV], Mahidol University Computing Center, Bangkok, 1994) を参照し、底本を訂正した。
- (2) 例えば、中村元『原始仏教の思想』上、春秋社、1970, pp. 258-264を参照。ただしそこに挙げられる用例のみでは不十分。‘vijñāna’ に関しては、三枝充憲『初期仏教の思想』、東洋哲学研究所、1978, p. 43f. を、‘sattva’ に関しては、後藤敏文「サッティヤ satyā- (古インドアーリヤ語「実在」) とウースィア *ośīa* (古ギリシア語「実体」) ——インドの迎った道と迎らなかった道と——」『古典学の再構築』9 (2001), pp. 26-40, (esp. n. 52) も参照。
- (3) Cf. Franke, *Dighanikāya*, p. 36, n. 3. 「この場合 ‘satta’ と ‘atta’ は同義。」
- (4) 蔵訳では、断滅論者の間接話法が用いられ、比較に適さない。(F. Weller [ed.], *Brahmajālasūtra: Tibetischer und mongolischer Text*, Leipzig, 1934, §184.)
- (5) 彼沙門婆羅門，因何事於末劫末見起斷滅論，說衆生斷滅無餘，於七見中，齊是不過。諸有沙門婆羅門作如是論，作如是見。【我身四大六入，從父母生，乳哺養育，衣食成長，摩捫擁護。然是無常，必歸磨滅。齊是名爲斷滅。】第一見也。(T. 1, p. 93a; 【 】内が断滅論者の言葉；第2-7見は下線部の「身」の語を欠く。この第1見の「身」は意識による補いか。)
- (6) 有想論第1見：te ca bhonto samaṇabrāhmaṇā kim āgama kim ārabha uddhamāghatanikā saññivādā uddham āghatanā saññiṃ **attānaṃ** paññāpentī soḷasahi vatthūhi? ‘rūpi attā hoti arogo param maraṇā saññi’ ti naṃ paññāpentī. (p. 31)

- (7) **sato** vā pana **sattassa** ucchedaṃ vināsaṃ vibhavaṃ paññāpentī. (MN II, p. 228) 相当蔵訳では、断滅論の ‘sato sattassa’ に相当する語が存在しない。(P. Skilling [ed.], *Mahāsūtras : Great Discourses of the Buddha* vol. I, Oxford, 1994, p. 313, §2.1.) 一方、『阿毘達磨大毘婆沙論』の当該箇所引用では「我」の文字が存在するが (T. 27, p. 996b19), 先行文に訳を合わせた可能性も有り, ‘ātman’ や ‘sattva’ の訳語かどうかは判然としない。
- (8) 現世涅槃論の場合に関しては未検討。涅槃観と関連する問題でもある。
- (9) 同じ様な観念が垣間見える用例として, SN III, p. 22, l. 7f. や SN IV, p. 400f. も参照。
- (10) **rūpūpayaṃ vā bhikkhave viññāṇaṃ tiṭṭhamānaṃ tiṭṭheyya**, rūpāramaṇaṃ rūpapatiṭṭhaṃ nandupasevanaṃ vuddhiṃ virūhiṃ vepullaṃ āpajjeyya. 「比丘達よ、認識機能が物質に傾倒して存続し、物質を抛り所とし・物質を本拠とし・喜びに携わり〔存続するなら〕、増加・成長・増大へと到るだろう。……感受作用・想い・形成作用についても同様……」 (SN III, p. 53 : 下線部底本 : rūpupāyam を訂正。Cf. CPD s.v. upaya.)
- (11) 【 】を用いた同様の論理展開の用例として, Abhidharmakośabhāṣya 8.3 (p. 434) も参照。
- (12) Bhikkhu Bodhi (tr.), *The Connected Discourses of the Buddha : A New Translation of the Saṃyutta Nikāya* vol. I, Oxford, 2000, pp. 1060-1063. 本邦では、中村元博士が、三人称の読みを一人称に訂正する様指摘されたうえで、文脈の相違に関しては、より古い經典（仏語）の内容がより新しい經典（断滅論）で排斥されたと解される。(中村元『原始仏教の思想』上、春秋社、1970, pp. 203, 269f.)
- (13) *no c’ assaṃ no ca me siyā* ti sace **ahaṃ** atīte **na siyaṃ**, etarahi pi me ayaṃ attabhāvo na siyā. (Mp V, p. 27)
- (14) 底本 : atth’ であるが、異読を採用。バラレルの Abhidharmakośavyākhyā も ‘ath’ の読みを支持する。(Wogiwara [ed.] , p. 270, l. 27-29)
- (15) *no c’ assā* ti atīte attabhāve **nibbattakaṃ kammaṃ no ce abhaviṣsa**, *no ca me siyā* ti etarahi me ayaṃ attabhāvo na siyā. *na bhavissati* ti etarahi me **anāgatattabhāvanibbattakaṃ kammaṃ na bhavissati**. *na ca me bhavissati* ti anāgate me attabhāvo na bhavissati. (Mp IV, p. 38)
- (16) MN II, p. 264, ll. 20-22 ; Ps IV, p. 65, ll. 19-26.
- (17) *na bhavissati na me bhavissati* ti, idāni pana tathā parakkamissāmi ; yathā me āyaṭiṃ khandhābhiniṭṭhako **kammasaṅkhāro na bhavissati**, tasmīṃ asati āyaṭiṃ paṭisaṇḍhi nāma na me bhavissati. (Spk II, p. 275)

- (18) *tattha, no c' assa no ca me siyā ti*, (I) **sace ahaṃ na bhaveyyaṃ** mama parikkhāro pi na bhaveyya. (II) **sace vā pana me atite kammābhisaṅkhāro n' ābhavissa**, idaṃ me etarahi khandhapaṇcakaṃ na bhaveyya. (Spk II, p. 275; 下線部 M., Th.: *assaṃ*.; 両版より底本: *-sankhāro* を訂正。) (I)は '*assaṃ*' を, (II)は '*assa*' を支持。
- (19) 瞑想中のマハーカッチャヤナを見てブッダが発したウダーナ。
yassa siyā sabbadā sati satataṃ kāyagatā upaṭṭhitā :
no c' assa no ca me siyā na bhavissati na ca me bhavissati,
anupubbavīhārī tattha so kālen' eva tare visattikan ti. 「いつ何時も身体に向けられた思念が〔以下の様に〕 '**no c' assa** ——' 〔と〕安立している者、彼はそこにおいて順を追って過ごしている者であり、ほかならぬ適時に愛着を渡るのであろう、と。」 (Ud, p. 78)
- (20) SN 22.152及び24.4は、対応箇所が見出せない。SN 22.81は『雜阿含經』卷第二 [no. 57] (T. 2, p. 14b1-8) に相当箇所を有するが、逐語的な対応を見ず、不明である。
- (21) 衆賢作の『阿毘達磨藏頭宗論』(卷第二十六; T. 29, p. 890ab) もほぼ同内容。
- (22) プラダン '75年本, p. 290, ll. 16-18; Upāyikā (北京版 Thu 16a4-5) も同様。Cf. 本庄良文「シャマタデーヴァの伝える阿含資料補遺—随眠品・定品—」『教育諸学研究論文集』14 (2000), pp. 55-70 (esp. pp. 56-58)。
- (23) 第215經「第一得經」: 我無, 我不有 (T. 1, p. 800b) と簡略にされる。
- (24) Upāyikā (北京版 Tu 128a4-5) も同様。Cf. 本庄良文「シャマタデーヴァの伝える阿含資料—世品(2)—」『佛教史学研究』33-1 (1990), pp. (1)-(17), (esp. pp. 5-8)。
- (25) 第75經「淨不動經」: 世尊, 若有比丘如是行, **無我, 無我所, 我當不有, 我所當不有**。若本有者, 便盡得捨。(T. 1, p. 543a) 第6經「善人往經」: 比丘行當如是。我者無我, 亦無我所, 當來無我, 亦無我所。已有便斷, 已斷得捨。(T. 1, p. 427a)
- (26) SN 22.55には、以下の2漢訳が対応する。『雜阿含經』卷第三 [no. 64]: 爾時世尊歎優陀那偈。法無有吾我, 亦復無我所, 我既非當有, 我所何由生。比丘解脫此, 則斷下分結。(T. 2, p. 16c) 『大智度論』卷第三十三: 如佛在舍婆提毘舍佉堂上陰地經行, 自說優陀那。所謂, **無我無我所是事善哉**。(T. 25, p. 307a)
- (27) 藏訳から見ると, '*bhaviṣyāmi*' と補うべきである。ただしその場合, 韻律が崩れる。

- (28) イタリックは欠損部。下線部は Chakr. に基づく補い。相当蔵訳 (15.4) もほぼ同様。
- (29) 『阿毘曇毘婆沙論』卷第三十二もほぼ同内容。(T. 28, p. 233b22-25) また、同様の記述は『阿毘達磨大毘婆沙論』卷第百九十二にも存在する。(T. 27, p. 961a)
- (30) 『中阿含經』第200經「阿梨吒經」(T. 1, p. 764c) や『阿毘達磨大毘婆沙論』卷第百三十八 (T. 27, p. 713b) 六見處に関しては、細田典明「『雜阿含經』見相応と『發智論』見納息」『印度哲学仏教学』10 (1995), pp. 106-129 (esp. nn. 21, 22) も参照。
- (31) これ以外に、Bodhicaryāvatārapañjikā (ad 9.57), 『四百論註』(ad 9.25, 12.7) も参照。

